

東京の教育

復刊第四号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市中区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

日本神話における「高天原」の訓読の転訛に関する研究(2)

松浦 明博

承前

すでに吉田留や武井睦雄らによって「高天原」の訓注が取り上げられ、「古い時代の発音の保存のため」に「あま」と訓注のままに訓むべきであるとの指摘がある。武井は、「高天原」の訓注は「(天)字が(アメ)でなく(アマ)をあらわすことを示し、その直前の「高」字のあらわす(タカ)と結合して両者で「タカマ」をあらわすものと受け取る」と認識したうえで、「このような背景があるにも拘らず、この訓注は(天)字を(アマ)と読むよう指示しているのは、(たかまのはら)と短縮せず、(アマ)の言葉を残すことの伝承者の強い思いの現れではないだろうか」と問題提起をしている。さらに、「多くの語の古形を伝えるこの『古事記』においては、これを(タカアマノハラ)とよむべきである。この(タカアマノハラ)のかたちこそ古い時代に一般的に用いられていた語形」と結論づけた。小松英雄は、「高天原」という構成ならば、「タカマノハラ」ではなく、ここは

「タカアマノハラ」であると論じた。山口佳紀もまた、「訓注は、(高天原)が、(高天原)でなく(高天原)の構成であること」であり、『古事記』の訓注は、読者が本文の内容を間違いなく読み取れるよう施されたものである。」と、「タカアマノハラ」と読むべきことを説いている。山口は、「高天原」はタカアマノハラと訓むべきであろう。この語がタカアマノハラという構成であることを示そうとしている以上、そう発音せざるを得ないはずである。聞きなれない発音である違和感を感じるのは、むしろ後世的感觉である」と上代人の感覚を重視している。

これらは、「高天原」の語形構造を読者に理解させるために「アマと訓め」と訓注がなされたとの主張であり、説得力がある。しかし、当代において「天原」をアマノハラと読むことが通常であったなら、そこにあえて訓注する必要があったのだろうか。

もし、高天原が、「たかあまのはら」であったならば、『高天原』と記し、「之」が入るはずである。『日本書紀』においても【高天原】と【高天之原】の二種類の表記がみられる。これも単なる表記漏れではなく、出所や読み方等に何らかの違いがあったと考えるのが自然であろう。

吉田留は、高天原の用語が、延喜式の祝詞に多く存している点に着目した。そこで「高天原」と「高天之原」・「高天能原」・「高天乃原」等の二様の書き方があることを見出している。そして、「高天之原」のように「ノ」が入っている祝詞は、祝詞のいずれも、平安遷都以降の比較的新しいものであるとした。古い祝詞の「高天原」のところには助詞の「之」が入っていないこと、祝詞が古い読み方を重んじたことから、吉田はタカアマハラとノを入らずに読まれたと主張した。タカマノハラと発音した以前の古い祝詞の時代、原始的な神道(古神道)においては、祝詞もタカアマハラと読んだ可能性を示唆している。

古代日本人の精神世界に触れることを欲し、また、我が国の将来を担う青少年に日本神話への関心と理解を与え、その魅力を説くならば、「高天原」にいかなる訓みがふさわしいのか、識者各位に謹んで再考を願うものである。

(会員 大月短期大学)

学習指導要領における『聖徳太子』教科書記述問題の推移と問題点

空花 正人

文科省は次期学習指導要領改訂案において「聖徳太子抹殺」を謀ったが、全国の良識ある人々の総力を結集した反対要請により、改

悪が阻止できたことは、一つの画期である。

問題の発覚は、二月十四日に文科省が公表した改訂案とパブコメ募集による。ここで明らかにしたのは、慣れ親しんだ聖徳太子の呼称が厩戸王に置き換わっていたことである。このほかにも大和朝廷が大和政権にかわり、元寇がモンゴル襲来となり、鎖国が消えた。そして琉球・アイヌの扱いにおいては文化についてもなお一層詳しく指導させられることである。なお、領土に関する記述が政府見解通り、我が国の立場に立って丁寧な記述せよとなったことは評価できる。

「新しい歴史教科書をつくる会」は真つ先に行動を起こした。二月二十一日、早速メディアを通じて問題提起の声明を発し、聖徳太子奪還の意見を文科省に提出するよう国民に呼び掛けた。次いで藤岡副会長は産経新聞コラム「正論」で、問題の所在を詳しく説明し読者に訴えた。この知らせは瞬時に全国に拡散し、抗議の声が沸き起こった。三月七日には文科大臣宛てに改善要望書を出し、国会議員に見解書を送付した。これに応じた幾人かの国会議員有志が委員会でも文科省に真意を質し、改善を求めた。パブコメ募集はわずか一カ月間、三月十五日に締め切られたが、計一万二千二百十件の意見が寄せられ、およそ四割にあたる約四千六百件が「聖徳太子」についてだったそうである。異例な意見数の多さは

国民的憤激の強さを物語っている。自民党文科部会は文科省に経過説明を求めるなど、文科省は反省せざるを得ない状況に追い込まれた。

こうして最終的にまとめられた学習指導要領は、改善要求通りほぼ従前の内容に収まった。しかしながら今回の騒動で明らかになったことは、前回平成二十七年検定で辛くも合格した『学び舎』の教科書において、すでに聖徳太子が厩戸皇子であったり、大和朝廷が大和政権に置き換わったりしていることが示すように、左翼史観が文科省に相当浸透していることである。

文科省は教職員組合の「裏検定基準」で示された線に沿って、新規参入の学び舎教科書を検定合格させ、いよいよ今度はその裏検定基準を公式なものとして表に出してきたわけである。

パブコメなどで一旦押し返したように見えるが、油断大敵である。各教科書会社は文科省の傾向を忖度し、次回教科書検定に向けて学び舎的教科書内容を書いて出してくるであろう。今後左旋回が進む恐れが十分にある。われわれ教育正常化運動を目指す者にとって新たな局面を迎えている。

(会員)

教育界に忍び寄る中共政府の魔手

佐藤 健 二

六月十九日付け産経新聞一面トップに「苦小牧駒澤大が中国化する」といふ五段抜きの大見出しが出てゐた。これは産経がキャンペーンで特集をしてゐる「異聞 北の大地」といふ北海道が中国資本に食ひ荒らされてゐるかといふルポの一環である。

話はいふことである。苦小牧駒澤大(以下、苦駒大)が経営難により中国と関係が深い京都市の学校法人に無償で移管譲渡することになったといふのである。この記事によると、移管譲渡までの経緯が不透明な上に苦駒大が「中国人民大学」になり、駒大グループ自体が中国化するのではないかといふ不安が広がつてゐるといふ。

移管譲渡を受けるのは「学校法人京都育英館」といふのだが、この法人が経営してゐる学校の一つに関西語言学院(京都市)がある。この学校は、中国の高校や大学を卒業した学生を日本の大学や大学院に進学させるための日本語学校であり、生徒は全員が中国人であるといふ。しかも、この法人の理事には中国人が二人ゐて、その一人が中国共産党員であることは調査済みである。これはどういふことを意味するか。この事業の背後には明らかに中国共産党政府が存在するといふことであり、中共の対日工作の一環と見て間違ひ

ない。理解できないのは、なぜ総額約五十億といふ巨額な資産を「無償で」移管譲渡するのかといふことである。この問題が孕む危険性は、森友学園問題や加計学園問題どころではない。彼らの長期戦略から考へると、我が国の教育の根幹を揺るがす大事件に発展する危険が伏在してゐるのである。少なくともさう危惧する政治家がゐてもいい筈だ。中共政府が日本の教育、それも高等教育へ手を突っ込み始めたといふことなのである。将来この大学を卒業し、日本国籍を取った中国人が、我が物顔で我が国の教育や政治に介入する橋頭堡の役割を担ふ可能性が大いにある。ある宗教団体が大学を設立し、信徒を官界や法曹界に多数送り込んでゐるといふのと同じ構図である。

産経新聞が報道してゐるやうに中共勢力は、北海道の各地に土地の買収を進めつつ、留学生や労働者の移住を促進し、やがては彼らの定住化のための足がかりとして、より高度の教育拠点を確保したいと思つてゐる。それが実現するかもしれないのである。

苦駒大の設置者変更の認可申請は、現在進行形の話で、結論が出た訳ではないが、これは単に一大学の問題ではない。もちろんこのことの危険性については、学校法人駒澤大学の運営主体である曹洞宗寺院の最高議決機関である宗議会は十分認識してをり、曹洞宗関係者は強硬に反対してゐると言ふ。当然であらう。ではいつたい苦駒大の無償移管譲渡

を推し進めたのは誰なのか。背後にどのやうな勢力が蠢いてゐるのか。森友・加計問題で与党を厳しく追及してゐる野党諸氏には、この我が国の教育の根幹を揺るがすやうな学校法人の「無償」移管譲渡といった苦駒大の不審な行為についても徹底追及してもらひたいものだ。

(会員)

『碧雲荘』保存運動の顛末

藤井雅和

本紙復刊第一号で、東京都杉並区にあつた「旧『碧雲荘』」を話題にした。即ち、この建物は関東大震災後の東京の下宿建築の典型で昭和初期に建てられた貴重な建築物である

こと、また作家の太宰治や檀一雄が居住したことがあるなどの文学史的な価値が高かつたことで著名な建物であつた。この価値を重視した地元の人々が保存運動に乗りだし、芥川賞作家といはれる芸人まで動員して数千の署名を集め、杉並区長に提出した。しかし、土地建物を取得した杉並区は建物を取り壊すことを画策し、区長はこの価値を認めることなく解体を決定した。それを知つた大分県由布市湯布院町で旅館を営む篤志家が私財二億円を投じて建物を譲り受け現地に移築した、といふこれが概略である。

太宰の関係で言へば、生まれ故郷の青森県では生家が五所川原市によつて保存され「斜

陽館」として国の重要文化財に指定されてゐる。また太宰が弘前高校時代に下宿した建物が弘前市によつて「太宰治まなびの家」として同じ市内に移築保存されてゐる。青森では自治体が積極的に保存に力を入れ、文化施設として活用してゐることが特筆される。

また、千葉県船橋市内の旅館は太宰が執筆した部屋を保存し、山梨県富士河口湖町の御坂峠の茶屋は井伏鱒二や太宰治が逗留した部屋を改築の際も復元してゐる。最晩年を過ごした三鷹市では、縁の酒屋跡に市が「太宰治文学サロン」を建てて文学資料を展示している。ここには単に観光地の集客目的といふだけにとどまらない、文化といふものへの見識が存在してゐよう。

確かに、太宰はその最期の遂げ方ゆゑに一部に激しく嫌ふ向きがあることは承知してゐる。しかし本件は文学遺跡にはとどまらず建築遺産でもある。一旦失はればすべての文化財は元へは戻らない。少しでも意義のある物は目の前の利害に囚はれず、踏みとどまつて次代へ伝えて行くのが行政の務めであらう。奇特な人の善意に頼らねばならないといふのでは、誠に情けないことである。

さて、前述のやうに湯布院で『碧雲荘』はほぼ原状どほりに移築され、「ゆふいん文学の森」といふ文化施設として再生した。四月中旬には由布市市長などが出席して開所式が行はれたが、そこに杉並区区長も出てきて挨拶をしたのである。区長の話の中で、「解体

の決定に「悩んだ」云々の発言を聞いて、その場に居合はせた保存運動の関係者たちは一様に鼻白む思ひであつたといふ。更にこの区長は杉並区のホームページに湯布院への移築が区長の意向であつたかに取れる文言を載せてゐる。

区と建物の元の所有者の間でどのような取引があつたのかが明らかでないでこれ以上の論評は差し控へるが、民主党出身のこの区長の言動は一部の政治家の本性をかいま見たやうで興味深い。

自らの出自に対する疑惑は徹底的に隠蔽するが、相手にはありもしないレッテルを貼り付けて攻撃する手合ひが政治家と称する輩の中にゐる事は現実には承知してゐるが、こちらは他人の功績を自分の手柄のやうに見せかけて宣伝するといふ、それに輪をかけたやり口でこれにはただ呆れるばかりである。

自己の失策を救つて呉れた恩人になりすましてその功績を横取りするかのやうな言動をする、かうした連中が政治の世界にもゐることを改めてしつかりと見据



旧「碧雲荘」

(東京都杉並区天沼)

多ておきたい。

文化伝統を守らうとする意思のないといふことが、実は日本の社会の破壊を目論んでゐる勢力とどこかで繋がつてゐるのではないか、そんな危惧を抱かせるに足る今回の出来事である。

(会員)

大阪文学散歩のすすめ

大阪市内にも文化伝統に関する史跡は多い。文学に関するものだけでも相当の数になる。日本教師会大阪大会の機会に、こうした文学碑を訪ねてみるのもよいだろう。(地名はすべて大阪市)

「松尾芭蕉終焉の地」碑(中央区久太郎町四丁目十一番 南御堂門前)

御堂筋の真宗大谷派難波別院南御堂の前、道路反対側の南行き車線の分離帯の中にある。車に注意。南御堂の境内にも、芭蕉句碑がある。尚、墓は近江の国の義仲寺(大津市馬場一丁目五番)にある。

「井原西鶴墓」(中央区上本町西四丁目一番 誓願寺墓地内)

墓地内には私立学問所「懷徳堂」を百四十年に亘つて代々経営した中井一族の墓もある。又、谷町四丁目交差点の北(中央区谷町三丁目二番)には、「井原西鶴終焉之地」の碑と辞世の歌碑がある。

「近松門左衛門顕彰」碑(西成区太子二丁目三番 松乃木大明神境内)

元天王寺公園内にあつた。尚、露天神社(北区曾根崎二丁目五番)境内にも近松の戯曲で有名になつた曾根崎心中関連の碑がある。

「与謝蕪村生誕地」碑(都島区毛馬町三丁目七番 淀川毛馬堤防上)

「春風馬堤曲」の中の句が刻まれている。

「折口信夫生誕の地」碑及び歌碑(浪速区敷津西一丁目七番 鷗町公園内)

又、すぐ近くの敷津松之宮 大国主神社(浪速区敷津西一丁目二番)の境内にも歌碑がある。墓所は羽咋市だが、願泉寺(浪速区大國二丁目二)の折口家墓所にも分骨して祀られている。(編集部)

◎日本教師会第五十七回教育研究全国大会

期日 八月五日(土)～六日(日)

会場 「ホテル アウイーナ大阪」

(大阪市天王寺区石ヶ辻十九)

研究主題 「道徳科の授業のあり方と課題」

「研究紀要」の原稿を募集中です

30字×42行 七月二十日〆切

期日が間近に迫つてゐますが、お手持ち等の原稿があればどうぞ。

岐阜事務局(enail:haideo@nifty.com)まで。

◎「東京の教育」への会員の皆様からの寄稿をお待ちしています。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp